
gradge

クロイ名無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

gradage

【Zコード】

N7487Z

【作者名】

クロイ名無

【あらすじ】

主人公の深峰快は特に変わったところのない高校生春、高校2年生になつた日、友達の西又良^{にしまだりょう}や幼馴染の天野桜^{あまのさくら}などと話していると文通の話になり、快も文通を始めることに初めて早々『グラッジ』と名乗る人物と文通をすることにしかし、数日後に届いたグラッジからの奇妙なメールで快の人生は大きく変わる

恋愛、ホラー、推理（？）、いろいろ混ざった（混ざってしまった）

新ジャンル（？）小説

小説＆まんが投稿屋にて連載済み

始まりのメール～序章～

To グラッジ From

春は出会いの季節だと友達から聞いたことがある。確かに、入学式やら進級などで出会いは必然と増えるだろう。卒業式を言えば別れの季節だが……まあ、そこは気にしないでおこう。とりあえず、春は出会いの季節だ。君と会えたのも何かの縁だと思つて、仲良くしていきたいと思う。よろしく

俺はパソコンに簡単に文を打ち、送信相手へのメールアドレスが間違つていなかを確認して送信ボタンを押した。

「ふう。流石に初めてのことってのは緊張するな。」

俺は椅子の背もたれに体重を預けながら、一息ついた。そのときにはもう、画面に『送信完了』と表示されており、引き返せないところへ来ているのだと実感できた。

「しかし、いくらなんでも俺までマジでやるとは思わなかつたな。」

俺は自分に呆れながら昨日のことを思い出した。昨日は始業式で、数週間ぶりにクラスの人と会つた。春休みということで、会わない期間は短いので、誰もそこまで変わつていなかつた。メールで話したりしていたので、直接は会つていなくても自然と話せる。その時に出てきた話題が【文通】。文通と聞いたときは「これまた古風なことを」と思ったが、実際は少し違つて、ただ単に専用のメールアドレスを作り、ネットに晒す。そして文通をして欲しいという内容を書き、そのメール宛に来た最初のメールの人と文通みたいにメールをし合おうというのだ。もちろん、晒すサイトはちゃんと友人のサイトで、注意として送るとどうなるかは書いてあった。俺は反対したが、皆がその話にのつたこともあって、その日からスタートしたのだ。そして、その日の夜、さっそく俺の元にメールがやつてきた。名前は『グラッジ』と書かれていて名前からは男か女かは分からぬ。内容は簡単なもので、挨拶だけで終わつていた。

「…………さて、そろそろ学校へ行く用意でもしとくか。」

俺は電源を落とし、立ち上がった。俺は狭い部屋の端にあるクローゼットやタンスから服を取り出し、着替えた。脱いだ服は綺麗にたたみ、タンスの中へ入れると、1階へ降りていった。

「あ、快君。おはようございます。」

1階へ降りると、幼馴染の天野 桜が椅子に座つてご飯を食べていた。昔から勝手に入つて（合鍵渡したのは俺だけど）勝手に食べているので、問題はない。長い黒色の髪にはウェーブがかかっていて、その髪は腰より少し上まで伸びていた。顔立ちはスッキリしていて、美少女と言えるほどの容姿。おまけに背が少し低いので、学校では人気者（マスク戻す意味を多く含む）の幼馴染だ。ただもう一つ、この幼馴染の左手がないことも、有名な理由だ。他にも背中に、大きな火傷の跡があるが……まあ、知つてるのは俺ぐらいだ。

「快君は朝、どうします？」

「え？ あ……どうしようか……。」

桜のこと気に取られていて返事が変になつてしまつたが、なんとか気づかれなかつたと思つ。」

しかし、朝か……。基本的に俺はあまり食べ物を食べない。とうより、食べられない。特に調理したものが駄目だつたりする。なぜ駄目なのか。それはよく分からぬけど、なぜだか体が拒否する。空腹が限界近くまでくれば食べられるが、基本的に食べようとすれば吐いてしまう。無理をすればなんとかなるが、両親が出張中ので、無理に食べる必要はあまりない。俺が食べないと両親が心配するから、その時のために体力は温存しておこう。……まあ、ただ食べたくない言い訳だけ。

「いや、いいや。」

「そうですか。」

桜はそう言つと、片手で器用にご飯を食べ、立ち上がつた。そのまま歩いていき、桜は食器を流しに置き、日曜大工が趣味の父が、桜のために付けた、食器を固定するものに固定して、食器を洗つた

「じゃあ、いきましょうか。」

朝なうえに桜は小食なので、さっさと食器を洗うと、カバンを持ち一緒に玄関を出た。昔から小・中・高と同じ学校へ通っているので、一緒に登校するのが普通になつていて。中学の頃は冷やかされたりしたが、俺も桜……は赤くなつて恥ずかしがつていたが、俺のほうは特に気にならなかつたので、いつも一緒に登校していった。桜自信も、恥ずかしがつても、毎朝俺の家まで來ていたので、本当に、単純に恥ずかしかつただけなのだろう。

「そう言えば快君。昨日、西又君と話していた文通のことなんですが、誰かから返事はあつたんですか？」

『西又君』とは、例の文通の提案者であり、本名は『西又 良』。楽しいこと一番を信念とさえしている奴である。現に、付き合いはそこまで長いほうではないが、今までに法律違反をギリギリで避けている感じだ。……つまり、解釈の仕方によつては法律違反をしているのだ。本人は、警察に捕まつたりしない限り無罪だと主張しているが、実際にはギリギリである。

「ああ。一応な。昨日の夜に來たんだ。」

「へえ。こいつてはなんなんですが、変な人ですね。」「変? どうじうこと?」

「あちらも専用のメールアドレスかもしませんが、それでも見ず知らずの人にはアドレスを教えて連絡の仕合をしようとしてきたからですよ。」

確かにそう言われば変な人だ。とりあえず、俺だつたらメールは送らない。相当暇をしていたら別だが、それなら見ず知らずの人と連絡を取り合つより、友達にメールをした方が楽だし、楽しい。

「それで結局のところ、その文通は何をするんですか?」「何つて……普通に世間話をするだけだけど?」

「なんですか? 私、文通をやつたことがなくて、どんなことをするのか気になつていたんですよ。」

実は、桜は携帯すら持つていない。今の時代、なくては不便とま

ではないものの、持っていないのは珍しいが、本人が必要ないと言っているので置つてないらしい。

「特に特別なことをする気はないな。良なんかは相手が女性だったから会いたいって言つてたけど」

「快君も、もし近所に住んでいたら、一緒に出かけたりしないんですか？」

「ん~……どうだらう。」

「そうですか。……ところで、話は変わりますが、数日後にこの町の神社でお祭りがあるのは知っていますか？」

「祭り？」

祭りなんてあつただらうか？春祭り？……いや、ないだろ

「なんでも、ある国の首相さんの奥さんの生まれがこの町のようで、その首相さんと奥さんが数日前からこの町に来てるらしいんです。それで、出国前にお祭りをするらしいですよ。」

「へえ~。……それで、桜はその祭りに行くのか？」

「すみません。私はその日は用があるので、いけないんですね」

「そうか。なら俺も家にいるか。良と男2人で回るなんて悲しいだけだからな」

その後も、なんでもない雑談が続き、登校した。俺と桜は一緒にクラスなので、教室へ行き、席へ着いた。

「よう。誰かからメールは来たか？一応、お前以外に聞いたが、誰も来てないそうだ。」

席に着くと、さつきの話に出てきた西又 良が現れた。長身で、ボサボサな髪。元々の顔はいいはずなのに、性格ゆえにヘラヘラした顔になり、一部の女子に『残念なイケメン』と呼ばれている男。楽しいこと一番という性格を除けば、明るいし、義理堅いし、頭はいいしで、むしろその性格を除ければモテモテだろうと想像できる。昔本人に言つてみたが、「無理無理。この性格は直らないって。それに、俺はそこまでイケメンじゃないって。」と返された。

「俺の所には昨日の夜メールが来たぞ。」

「何ー? マジかー。どんな奴だ!」

俺が言つと、良は顔を思いつきり近づけてそう尋ねてきた。……

「どうでもいいが、顔が近い。

「ああ。グラッジって名前の人から

「グラッジ?名前からして男っぽいな。」

「でも、偽名だろ? 俺だつて だし」

ついでに言つと、元々は快という名前だから『カイ』にでもしようかと思ったが、『かい』で変換してみると、ギリシャ文字で『』があつたので、そつちにした。

「まあ、そうだけど、女性で『グラッジ』なんて付ける奴いるか? 好きな歌手とかそういうのなら分かるけど、そんな奴は聞いたことないしな。」

楽しいこと一番とこつことで、女性方面の雑誌などすら読む良が言つながら、ほとんど間違はないだろう。

「桜ちゃんも聞いたことないだろ?」

「..... そうですね。聞いたことがないですね.....。」

桜は少し考へると、そう答えた。そう答えたところでチャイムが鳴つてしまい、そこで会話は終了し、良も席へ戻った。担任が何か言つているが、聞き流す。そして重要なことではないだろう。朝の担任の報告を真面目に聞く奴など、桜や良以外にはいないだろう。な。むしろ、重要なのはこの後だ。この学校、特に進学校でもないどころか、授業自体、真面目にやる教師がないのに、始業式の次の日から通常授業がある。しかも、今日は金曜日で、明日からまた休みなのに授業があるなど、無駄過ぎる気がする。面倒なこと極まりない。

何気ない日常

「ふう。流石に久しぶりの授業はキツイな」
授業が終わると伸びをしながらそう言つ。特に誰かに言つたわけではないが、隣の席が桜なので、何かしらの返事はしてくれるだろう。

「そうですね。」

言葉ではそう言つているが、桜は笑つてそう言つし、本人にはほとんど疲れが見られない。まあ、桜の場合は体型を維持するための運動以外はほとんどしないし、そこまで疲れるようなことをしている記憶がないので、『疲れている』という状態自体を見たことがほとんどないんだが。

「どうか、なんでそんなにも平氣そうなんだ?」

「春休みにも勉強はしてましたので。」

「へへ。……とは言つても、春休みなんて短い休みに、宿題以外をやる物好きなんて、桜以外にいないだろ?」

「いいえ、そんなことはないですよ? 春休みにたまに図書室へ行っていましたけど、大抵、西又君がいましたから。」

「あ……アイツも例外だな。アイツはお前みたいに勉強したくてしてゐわけじゃないから。」

良の場合、昔から「とりあえず勉強ができれば、犯罪以外なら何やってもいい」と親から言われ続けていたらしく、結果として、学年主席を楽々維持し続ける頭脳の持ち主となつた。桜も努力しているのだが、今まで一度も良に勝てたことがない。とはいっても、良とはいつもギリギリ負けてるレベルだし、3位の人との差が大きい。中の中の成績の俺からしたら十分過ぎる

「それでも努力を続けられるのは凄いことだと思いますよ?」

まあ、確かにそうだ。俺だったら、そんなことぐらいじやあ動かない。そりゃあ、学年主席を取るたびに100万円やるとか言われ

れば別だが、基本、放任主義な両親なので（とこより、出張ばかりの両親との記憶より桜との記憶の方が多い気がする）、良のような条件では動く気にはならない。

「まあ、とにかく、俺には休日の勉強は無理ってことだ。」

桜は「そうですか」と言ひ、「それでは帰りましょうか」と言い、立ち上がったので、俺も立ち上がった。

俺の家と桜の家は方角は同じだが、特別近いわけでもなければ、遠いわけでもない。まあ、歩いて5分ほどだろうが、住宅地なので当然だ。俺と桜は幼馴染だと思うし、周囲もそう言つてているので別に問題ないのだが、特に家が隣同士で子供の頃から兄妹のように育つた、なんてことはない。出会つたのが小学校入学前と言つ、早い時期だったでの、自然と一緒にいる時間が多かつただけだ。その頃から下校は一緒にしているので、今日も一緒だ。登校の方は小学校の頃からだつたはずだけど、なぜかは覚えてない。別にビリでもいいだろ？

俺は家に帰ると、さっそくパソコンを起動した。相手がどこの誰だかは分からぬけど、もしメールが着ているなら早めに返した方がいいだろ？と思つたからだ。……まあ、そんなマメなことをやるのも最初の内だけだろう。そう思いメールを確認してみると、メールが1つ来ていた。

T O F r o m グラシジ

確かに、春は出会いの季節だと思う。……でも、出会いがいいものかは分からぬ。出会わなければよかつた出会いもある。重要なのは、出会いつて、どう発展させるかだと思つ。だから自分は、出会いを探す前に、今までのことを振り返つてみたい。

……内容はとりあえず理解できるが、まさかそんな返事が来るとは思つていなかつた。他人がどういう考え方を持とうが、興味はないけれど『春は出会いの季節』なんて言つたのは良で、ただ単純にメールを書くときに思い出したから書いただけだ。俺自身は、このあとに簡単な自己紹介でもするのかと思ったけど、相手はそうは思つ

てないみたいだ。……さて、どう返せばいいのだろうか？急に話題を変更させるわけにもいかないし、かといって俺は春にそこまで関心があるわけではない。過去を振り返る気もないし、これから先の未来……例えば明日にでも、可愛い転校生が来る展開などを想像しても仕方ないとと思う。第一、転校生が来たとして、俺の人生にはほとんど関わらないと思う。桜と一緒に「転校生なんて珍しいな」とか言つたりして、少し話題にするだけで、すぐにどうでもよくなると思う。だから、自然と返信する内容なんて、適当に共感した振りをするか、反対の意見を書くしかないと思う。

俺は心中で『春は出会いの季節』なんてことを言つた良を恨みながら、メールの新規作成ボタンを押して、文章を書き始めた。

To グラッジ From

確かに、出会わなければよかつたと思つ出会い系もあつたけれど、自分はそこまで悪い出会い系がなかつたせいか、やはり出会い系が欲しいと思う。悪い出会い系も良い出会い系も、出会い系がなければ起こらないことだから、それが良い出会い系であることを信じて、出会い系を待ちたい

パソコンにそう入力し終え、送信ボタンを押した。一応、俺の本心を書いたけれど、果たしてこれでよかつたのかは分からぬ。別に気軽にメールする感じでいいのだろうけど、なにぶん、相手がどんな人か分からぬので、どう書けばいいのが分からぬ。良や桜相手の方がどれだけ楽かがよく分かる。さつきも考えたことと同じだけれど、俺は別に本氣で出会い系が欲しいわけじゃない。今ま、適当に高校生活をして、もしかしたら良や桜とは違う大学かもしれないけど、とりあえず大学に行つて、就職。飛び切り良い人じやなくても、悪くない人と結婚して、子供を作る。そしてゆっくり老衰。そんな感じの人生でいいと思ってる。むしろその方がいい。死ぬまで特に大きな変化のない生活でいいと思っている。悔やむ過去も無く、未来に希望を持つでもない、平凡な人生。初めのメールであんなことを書かなければ、おそらく、さつきのメールでも、『

出会いなんて興味ない』と書いたと思う。俺は時計を確認し、とりあえずの寝る時間を決め、ゲームを始めた。

始まりのメール～警告～

起きると畳前だった。まだ春休みのダラダラした生活が抜けないのか、目覚ましをセットしていなかつたからなのか、昨日寝たのはまだ早い時間だったのに、畠まで寝てしまつた。別に用事などはないし、親もいないのでいつまで寝ていても問題はないのだけ……流石に畠までというのはどうかと思う。

俺はベットから出てカーテンを開けた。外は当然のように明るくて、結構暖かい。再びカーテンを閉め、せっせと着替えて、カーテンをもう一度開け、下に降りる。昨日は朝、畠はもちもん、夜さえも食べなかつたので、今なら少しは食べられると思つ。

1階に降りると、当然のように誰もいない。両親が出張に出始めたころは違和感があつたけど、流石に慣れている。むしろ、もしかしたら、両親が帰ってきて、両親がいる方が違和感を感じるかもしない。

俺は冷蔵庫を開け、中を確認してみた。パツと見た感じ、すぐに食べられるのがイチゴ、ヨーグルト、チーズ、ワインナー。生でいいなら野菜。調理が必要なのが魚と肉。ご飯は炊いておいた記憶はない……といふか、使い方が分からないので、あるわけがない。冷蔵庫を閉めて、戸棚を開けると、ツナの缶詰が一つ。

……どうしよう。そこまで食べる気はしないとはい、流石に駄目な気がする。空腹自体は問題ないのだが、ヨーグルトやチーズでは、『食べた気分』というのが満たされない。俺にとつて重要なのは、『食べた』という満足感だからな。結局は『もう食べられない』という状態までは食べれないのだから、食べたという気分だけは持ちたい。……と、なれば一番いいのは魚か肉。……だが、俺に調理はできない。桜を呼ぶという手もあるけど、それは避けたい。こんなことで呼ぶのはどうかと思うし、向こうも迷惑だろ？

仕方ないのでツナの缶詰を取り出し、チーズとワインナーも一緒

に食べた。食べ終わると缶詰などの後始末をして、財布を持って外出した。夜はいらないにしても、明日の朝はたぶん、腹が減つているだろうから何か買っておかないとまずい。選択としては弁当かパン。せつき肉か魚を食べたいと思つていたためか、異様に何か食べたい。まあ、何かと言えば肉を食べたいんだけど。

歩いて10分ほどの所にあるコンビニに入ると、意外な人物を見つけた。

「よお、良じやないか。何してるんだ？」

雑誌売り場で立ち読みをしていた良に近づきながら、声をかけた。「おお、快か。お前」」やどうしたんだ？お前がコンビニに来るなんて珍しいじゃないか。」

確かにそうだ。普段から料理は親か桜がやる（ほとんどの場合が桜だけ）ため、出かけること自体が珍しい。例え出かけることがあつたとしても、それは桜と一緒にというのが多い。主な理由……というか、一緒に出かける理由の100%が荷物持ちだけど。まあ、その食材の5割ほどは俺の家の冷蔵庫に入るので、文句は言わないけど。

「俺は明日の朝……いや、昼かもしれないし、夜かもしれないけど、とりあえず明日の飯を買いに来た。」

「ん？お前の両親が出張中というのは聞いたが、桜ちゃんが作ってくれるんじゃないのか？」

確かに、あの甲斐甲斐しい幼馴染は、春休みの間も毎日飯を用意してくれた。朝来て、いつでも暖めれば食べられる物を作り、冷蔵庫に入れていた。だから、春休み中、俺は外でなくて済んでいたのだ。……まあ、結果としてそれはいいのか悪いのかは分からないけどな。

「今日は来なかつたんだよ。起きたのもつゝせつきで、食べたものもツナ缶1つにヨーグルトとチーズだけ。明日はそんなことがないようにと思ってな。」

「どうか、1日をそれだけで生きていくのか？」

良が不思議そうに見てくるが、俺は平然と頷く。確かに、常人ならちょっと無理だろうけど、俺にとつて常人の『腹が減った』というレベルはまだまだ大丈夫なレベルなのだ。ろくに食べる物がない生活をしている人にとっての『餓死する』より少し前のレベル辺りじゃないと、俺にとつての腹が減ったにはならないのだ。そりゃあ、昔は常人の『腹が減った』で何度も食べようとしていたけど、そのたびに吐くので、今ではもうその感覚すらなくなつた。食べられる状態になつても『あ、そろそろ食べないと』というような感じしかしない。昔はその感覚が分からなくて倒れたこともあった。

「で、お前こそ何してんだ？ 雑誌の立ち読みなんて珍しいんじゃないか？」

聞いた話だけど、コイツはチェックすべき雑誌は全て買っているらしいので、立ち読みなんてすることは思えない。……まあ、買うという時点で、こいつの所持金と毎月の小遣いがいつたいいくらのかとかが気になるけど。

「別に大した理由はないんだが、ちょっと妹がこの雑誌の話をしていてな。」

「へ～、妹がいたんだ。」

「コイツの妹と聞くと、どうしても変なイメージしか出てこない。なんというか……顔立ちとかは真面目そうで、成績はいいのに、天真爛漫な女の子。良自身、最低限の身だしなみは気にするらしいが、家では髪を梳かすなどしないらしいので、妹の方もボサボサの髪で……うん、切るのも面倒だからという理由で凄く長い髪とかしてそう。身長以上の長さがあつて、学校に行くときは括つたりして誤魔化してそう。

そんな俺の想像を知るはずもない良は、その先を説明してきた。

「妹の年代……俺たちより2年下なんだが、その年代でこの雑誌が流行っているらしい。」

良がそういう、こちらに見せた雑誌を見せてみると、単なる女性用のファッション雑誌だった。

「あれ？ 前に良が話してた方は流行ってないのか？」

俺は前に良が話していた雑誌を記憶を頼りに探し、取つてみた。

「ああ、そいうらしいんだ。なんでも、そっちの雑誌よりこっちの雑誌の方が服が可愛いだとか。」

「へ～。」

俺は良から雑誌を借りて2つを見比べてみたが……全く分からぬい。どっちも同じような気がする。そりやあ、微妙な差はあるけど、どっちも可愛い気がするし、正直、どっちでもいい気がする。

「良は……分かるのか？ この差が。」

「いや、認めるのは少し癪だが、分からぬ。」

「そうか。」

今まで、いろいろな雑誌を読んできた良が分からぬといふのは意外だが、それだけに、この雑誌の感覚は女性特有なのだというのが分かる。

「まさか俺に理解できない感覚があるとはな。世界は広い。」

高校2年生の時に痛感するものとしてはどつかと思つのはさておき、とりあえず俺はもう話すことはないので、弁当を買い、良に別れを言つて、コンビニを出た。

この辺りには特に娛樂はない。少なくとも、電車に乗らないとゲームセンターなんてものはないし、本屋すらない。電車に乗らずに行ける場所といえば学校かコンビニかスーパーぐらいなものだ。それでも日常生活には困らないので、滅多に電車に乗つたりしない。俺はさつと家に帰り、冷蔵庫の中に弁当を入れた。賞味期限は明後日なので、明日、万が一桜が来て飯を作つてくれたとしても、明後日の夜にでも食べればいいだろう。

俺は2階へ上がり、パソコンを付けた。昨日メールしたのが夜なので、たぶんメールが来ていると思つたからだ。

To From グラッジ

自分にはよかつた出会いなんてなかつた。出会つた人、ほぼ全員が殺したい人だつた。友達は勿論、両親さえ、なぜ自分を産んだの

かと恨んだ。だから、出会いを探す前に、定期的に過去を振り返り、自業自得だと思わない、誰かを殺しそうだった。

俺は内容を読んで驚いた。……だけど、すぐにその驚きはなくな

つた。ネット上などでは、結構こういうことがあるということを知っていたからだ。日常生活では口に出せない欲求、不満、怒り、嫉妬。でも、ネット上では簡単に出せる。俺は楽観的に考え、とりあえず慰め……というより、なだめの文を書こうと新規作成ボタンを押そうとして気づいた。もう一つ、メールが着ていた。現在、俺のこのメールアドレスを知っているのはグラッジ一人のはず。なぜこちらが返信する前に送ったのだろうと不思議に思いながら、そのメールを開いた

TO From NO NAME

今、私は貴方とグラッジが2日まえ、の夜に始めて貴方にメールをしたことしか知らない人、グラッジは明日から人を殺す。が、回数は6回つ、いに最後に死ぬのは快誰か止めてこ、のは人を殺、人す、る。本、當に天、に祈る、お、父、さんお母さん救、つて。病、院、院、へ来てさ、あす、ぐに。人、べ、ル、

そんな文が書かれていた。……正直、意味が分からない。なんなのだろう、このメールは。差出人は『NO NAME』。つまり未登録。グラッジではない。間違いメールということはないだろう。文の中に『グラッジ』という人物の名前があることから、少なくともグラッジと知り合い。更に、俺の名前さえ出ている。……これは誰なんだ？それに、変な文の区切り方。今じゃあ使われてるのか分からぬよな、『の前か後を繋げると正しい文になる古い暗号かと思つたけど、紙に書いて試してみても』今えがつこ殺す本天るお父救病院さあすヘル』か『私の回いの人る当にお父さつ院へあぐル』になって、おかしい。じゃあ、この区切りはなんだ？途中から文がおかしいことからも、明らかに無理矢理何かメッセージを作るために繋げたとしか思えないのに。……まあ、考えても仕方がない。どうせ俺には関係ないだろう。俺の名前が出ているけど、

変換ミスか何かだろ？」、グラッジの弟か妹が悪戯で送ったのだろう。

俺は適当に前の文の返事を書き、メールを送った後、適当にパソコン用のゲームをやったり、宿題をやったりして時間を潰した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7487z/>

gradge

2011年12月26日21時54分発行